

3 エリバンクの戦い

- 雄々しいジューデン・マリ
エリバンクにそびえる城の主を 知らぬものはないだろう
若きハーデンのウィリーが牛とともに捕まった
かの有名な戦いを 知らぬものはないだろう
- 老ハーデンは良き家臣たちをかかえる長 5
広間の食卓は家臣でいっぱいだが
ボーダー地方での略奪もかなわず 王の家畜はやせ細り
若者不足は何より悩みの種
- 若きハーデンのウィリーは獅子のように勇敢な跡継
武勲と勇気を試さんと望み 10
ある晩勇敢なウィリー・フォールズホープに呼びかけた
いかなる困難からも決して逃げぬ男
- 「ウィリーよ 我らの家臣は数が多い
我らの家畜は草地で腹をすかせてないている
良い牧草地を求めねば 15
ハーデンの牛がまたたった一頭になってしまう
- 「ボーダー越えはやめておこう
バクルーに捕まって 打ちのめされる
広い国境の守りは堅い
今宵はどこへ行こうか」 20
- 「ご主人様 マリの奴らがあなた様を愚弄し
あなたの牛を肴に大騒ぎしたことを覚えておいででしょう
どんなに策を巡らせても 奴らはいくぐり
逃げ足の速さは悪魔だってかなわない
- 「エリバンクの汚い城主 ジューデンもすっかりもうろく毫碌し 25
今は朝から晩まで女といちゃいちゃ
でも 300 頭の牛はまるまる太り
毛艶も見事な子牛たち」

「ウィリーよ では老いぼれジューデンにお見舞食らわそう
武器を持ったお前がいれば 何も恐れるものはない 30
かつて我らがサウデンのごろつきを破った時には
一番腕の立つ敵もお前に叩きのめされた

「イークウッドの牛小屋に奴の子牛を連れてこよう
せいぜい吠え面かくがいい
ずる賢い男だが 35
面目つぶれておたおたするはず

老ジューデンは川辺を散歩していた
その時ハギンショーの丘の見張りが大声をあげた
「ジューデン様 気をつけなけりや殺られちまいますよ
イークウッドの突撃ラッパが鳴っております」 40

「何たること 奴らには油断がならぬ
やけにおとなしいとは思っていたが
さあ合図の角笛を 家臣たちを集めるのだ
家畜は穏やかに寝かせねば」

合図の音に一番乗りの家臣が息を切らして駆けつけた 45
フィリップ塚の高台からはるばる駆けてやってきた
「お急ぎください 家畜のことなど構わずに
備えを十分になされよ さもなきや殺られちまいますよ

「ハーデンの若きウィリーはヤロー川を越えました
屈強な命知らずの男たちも一緒です 50
ホッグ家とブライデン家が攻めてきます
フォールズホープの猪野郎が先鋒です」

「何たること さあ高々と角笛を
プロラとトラクウェアーと勇猛なハロウリーに備えさせよ
目に物見せてやる 忌々しいホッグ家に呪いあれ 55
地獄の悪魔に代わって 打ちのめしてくれる

「武器を持った男たちも 奴らにやアザミに見えるらしい
アンクラムやソウドンで勇猛果敢な様を見た
それでも我らの弾丸や矢には敵うまい
仲間の奴らもろとも ねじり伏せてくれよう」 60

家畜は水場のそばに休ませた

エリバンクの岩山 アシスティールの川のそば
王の使いが丘を越える前に
ウィリーと仲間たちは角笛を派手に響かせた

ジューデンの奸智^{かんち}はハーデンの剛毅^{ごうき}に劣らず 65
家臣の帽子には白い羽根飾り
夜の闇は深く 仲間^{仲間}はピールの丘に集結し
ヒースの茂みに身を隠した

峻^{けわ}しい丘を牛は歩み
わずかな牧草を我先にと競い合った 70
そこでフォールズホープのウィリーが 仲間の半数と
数頭の牛を連れて群れを離れ 競う牛を落ち着かせた

ウィリーが丘の向こうに消えるやいなや
マリの者が激しく攻め入った
夜の闇にまぎれた戦いは 75
かつてエトリックの森にはない激しさ

剣がぶつかり 散る火花
アシスティールの丘に 流れる鮮血
関^{とき}の聲が上がったが 牛の啼き声も高かった
武具^{ひづめ}や蹄の音が絶えなかった 80

剣がぶつかり 散る火花
傷ついた者たちは 息も絶え絶えの呻き声
関^{とき}の聲が上がったが 牛の啼き声も高かった
それも知らずにフォールズホープのウィリーは牛を追っていた

フォールズホープのウィリーよ 何たる不幸か 85
やさしい妖精がお前にささやいてくれたなら
「ウィリーよ 戻ってお前のやさしい主人を救い出せ
槍に囲まれ戦っておいでだ」と

槍に囲まれてはいたが ハーデンのウィリーの仲間たちは
覚悟を決めて山のごとく動かなかった 90
フォールズホープのウィリーの助けを今や遅しと待ちながら
血の海の中 主人を守って立ちはだかった

仲間の勇気も技も報われず
若きハーデンが大勢を倒しても無駄だった

数に勝った敵どもは ほしいままに殺戮し 95
ハーデンのウィリーは囚われた

羊よろしく 手足を縛られ
エリバンクの塔にさっさと運ばれ
暗い土牢に放り込まれると
処刑は明朝と言い渡された 100

ラングホープのアンドリューは倒されたまま
戦いが終わるまで身動きできず
終わるや否や身を起こして丘を這い
絶望の声を上げた

「おお フォールズホープのウィリーよ お前は何をしている
何があった いったいどこへ行った 105
仲間は殺され お前の名誉も風前の灯
ハーデンのウィリー様も囚われた」

狩りで傷をうけた猪より激しく
獲物を横取りされた獅子や虎より荒々しく 110
動転し 罵りながら
フォールズホープのウィリーは 残酷な復讐を誓った

ウィリーは上着も胴着も脱ぎ捨てた
金具のついた帽子も脱ぎ捨てた
仲間を置いて走り出した
大切なご主人様を救うため 115

一行がエリバンクの丘に着いた時
門は堅く閉ざされて やがて東の空が白み始めた
一行は涙を浮かべ とぼとぼ立ち去った
老ハーデンに悲しい知らせを告げるため 120

老ハーデンは悲しんだが それ以上は取り乱さず
哀れな息子を運命の手にゆだねた
「あの子が死んでも 子はまた授かるかもしれぬが
あんなに立派な息子はもう望めまい」

略奪はその夜のうちに始まったともいわれるが 125
嘘か誠かわからない
あっぱ 天晴れジョック ヘンダーソンは 戦いの最中

十二頭ものものエリバンクの家畜を連れ出した

勇敢なシングリーのロビンは脳天を真っ二つに裂かれ
カークホープと若きベイリーリーも負傷した 130
ジューデンとともにゲイトホープとプローラはなぶり殺され
老アシスティールは膝に傷を負った

多くの勇者が若き命を散らし
その身はスティールの石塚に朽ち果てた
泣け 羊飼いよ 何と哀れな定めか 135
その心根の 何と忠実で勇敢で頼もしいことか

エリバンクの奥方は夜明けとともに起きだすと
老ジューデンを起こして尋ねた
「あの勇敢な若者をどうなさるおつもり」
「今日この日に 吊るすのさ」 140

「勇猛果敢な若者を吊して
三人の不器量娘をないがしろになさるおつもり
あの美しい森の指折りの君主に
命と引きかえに一番の不器量娘を娶らせましょう

「勇敢に戦った若者を 軽んじてはなりません 145
お仲間ともども あなたのお役に立つでしょう
君主には家臣が 家臣には食事が必要です
いかなる時も 食事は準備せねばなりません」

そこでジューデンはどっかと膝を組み
黙りこくり 奥方の説はもっともだと考えた 150
「よし奴に 娘のメグを娶らせよう
昨夜は一晩中娘の夢を見た」

メグはやせっぽちで 長い鼻
他に比類なき大きな口
灰色の目に 顔色も冴えないが 155
気立てはよく 上品だった

ほっそりと洗練された身のこなし
肩にかかる褐色の髪に艶はないが
三倍も見目麗しい乙女よりも
はるかに勝る心の持ち主 160

哀れハーデンのウィリーは 広間に連れ出され
部屋に掛かるカーテンは 一方は黒く もう一方は美しい
ジューデンは三人の娘を並ばせて
肘掛椅子に腰掛けた

「さてウィリー お前は若い やり直せよう 165
私に従えば お前の命は助けてやろう
賢くなれ このジューデンの友となり
我が娘メグを妻とせよ

「お前はエリバンクのわしの家畜を略奪し
お前の仲間もやりたい放題 170
角笛で知らせる者がなかったら
一頭残らず盗られたらろう

「娘のメグには どんな女も敵うまい
よく考えて決めるのだ
どちらでも好きなほうを選ぶがよい 175
よく見ろ 一方には棺桶 一方には花嫁だ」

「絞首台に送ってもらおう」ウィリーは答えた
「私の命などくれてやる 絞首台に送るがいい
お前の娘などまっぴらごめん
スコットランド人は死も厭わぬと知るがいい」 180

「よくわかった 己の行いを悔いるがいい
ならず者の盗人を連れて行け
メグよ どちらが賢い選択か 奴に思い知らせよう
拝み屋を呼んでやれ 懐の足しにはなるだろう」

ウィリーは絞首台に縄が架けられるのを見ると 185
勇気も消え失せ 悲しくなった
ジューデンの顔を見やり 目の中をのぞいたが
これっぽっちの迷いも見当たらない

最後の希望の光も消え失せた
ハーデンの緑の丘を見ることももうないだろう 190
足元には棺桶が あとはそこに入るだけ
誇り高い心もついにくじけ ウィリーは膝を折った

- 「ジューデン殿 待っていただけぬか
どうかあと三日 猶予をお与えください
私の所業と行く末について 195
あなたの親切なお申し出をよく考えたいのです」
- 「お前は私の申し出をはねつけて 私の娘を侮辱した
宙で自由に舞うがよい
これほど価値ある獲物を吊したことはない
一生分の悪行の芽を 今のうちに摘めるとは 200
- 「ここに我が娘の手 あちらに絞首台
今すぐに どちらか一つを選ぶのだ
全てはお前の故郷とお前の民のためなのだ
刑吏か神父か選ぶのだ」
- ウィリーは大間違いをしているように思えてきた 205
結婚するのと死ぬのでは大違い
「鼻が長かろうと 何だというか
鼻は幸運を呼ぶというから さぞ運が向きそうだ
- 「あの腫れぼったい 灰色の瞳もご愛嬌というところ 210
死人のような目じゃなけりゃ 無いよりはまだ
あんなに大きな口は見たことないが 何だというか
口が大きければ肉にもたっぷりありつけるというもの」
- その日のうちに二人は結婚し その夜のうちに床に入った
ジューデンは大喜びで贅沢な宴をひらき
絞首台を前にひどい顔をしていたと 215
花婿の肩をたたいては からかった
- 死んでいれば 顎から上は半ヤード彼方に吊るされて
きっと口はメグより大きくなっていただろう
痛みも感じず膝を折って落ちるところだった
スコットランド人は死も厭わぬそうだから 220
- ジューデンは言った「わしの家畜を盗みに来る輩ほど
豊かになったものはないと請け合おう
ブランクスホームもシアルステインも盗みに来たら
皆に妻を与えてやるのに」
- ウィリーはメグをきれいな森に連れて行き 225

仲良く幸せにくらした
妻を知れば知るほど 大好きになった
賢く貞淑で尊敬すべき妻だったから

二人はたくさんの子宝に恵まれ
勇敢な子供たちは 数々の手柄をたてた
皆の口が大きかったかどうかは知らないが
食べる肉には困らなかった

230

(鎌田明子訳)